ご寄稿綴り

～50周年に想う～

（50音順、敬称等省略）
※職名は当院退職時のものです。

設立50周年おめでとうございます

元病院長　井村 壽男

設立50周年を迎えられるとのこと、心よりお祝い申し上げます。

私が“成人病センター”に勤務を始めたのは1975年で、病院がスタートするのを機に京大から赴任してきた時から45年が過ぎ去ったことになります。着任時は間違えて向かいの守山病院へ行きましたが、病院はまだ開設していなくてその年の途中から外来がオープンしました。私の着任より以前から芹生・上畠先生をはじめとする9名の先生方が居られ（既に多くの先生が他界）、その後もそれらの先生たちと切磋琢磨、議論を重ねながら礎づくりに励んでいたことが遠い思い出になりました。

私は新病棟スタートの年の3月までの28年間お世話になりました。この間医療を取り巻く情勢も大きく変わり、現在では当たり前の事に対し一つずつ、多大の時間をかけて検討が重ねられました。医療情報システム導入へ向けての泊りがけの検討会、病院機能評価・臨床研修病院指定を受けるための布石となる救急告示病院の指定に向けての医局の先生方との時間外での数度にわたる検討、情報システムの実施交渉、医療安全体制の構築等、多くの職員の方々が前向きに熱意をもって取り組まれたことが深く印象に残っています。

放射線科医としても、単純撮影や造影検査主体からCT、MRIなどへの画像診断の画期的進歩、IVR治療の実施、放射線治療もベータトロンからライナックへの転換など大きく変わる放射線診療を経験することができ、また入院患者の方々からはホスピス病棟開設に続く終末期医療の大切さも学ばせていただきました。医師も初めは私一人から6名にまで増員していただき多くの先生方と一緒に楽しく勉強することができました。

医療情勢は常に変わるとは思いますが、組織体として病院の理念「心のふれあいを大切にして安全で質の高い医療福祉を創生し提供する。」の具現化に向けて、今後も皆さん一体となって進んでいただきたいと思います。

給食管理から栄養管理へ

元栄養指導部主任主査　川邉 安代

開設50周年おめでとうございます。

私は、新採で成人病センター勤務でした。

栄養士の業務は、医師から出された食事箋に基づいた食事を安全で、おいしく提供するため、献立の作成、食材の発注・検収といった食材管理、食数管理、衛生管理などの給食管理が主な業務でした。

当時の栄養価計算は、そろばんを用いての手計算で、献立表も手書きでした。その後、給食管理システムの導入により、手作業の部分は大きく削減されました。

平成16年（2004年）4月、2度目のセンター勤務となりました。この時には、食材管理や食数管理は業務委託されていました。

1回目と大きく異なるもののひとつに、管理栄養士の病棟担当制がありました。担当病棟では、がん治療の副作用で食欲が低下した患者さんのベッドサイドに行き、お話を聞き、病棟スタッフと情報交換をし、食事内容の変更を主治医に相談、病棟カンファレンスにも参加させていただきました。

その後、NST（栄養サポートチーム）では、管理栄養士として栄養アセスメント、必要栄養量の算定、経腸栄養剤、食事内容や補助食品の提案等を行い、多職種との連携をはかりながら、給食業務委託業者さんの協力を得て継続的に患者さんの栄養管理に関わることができました。

県立3病院と保健所をほぼ交互に異動していた私には、専門用語などわからないことが多く、戸惑うことも多々ありましたが、その後の業務においても貴重な経験になりました。

現在、総合病院は、がん診療連携拠点病院として重症のがん患者さんを受け入れつつ、コロナ禍での厳しい業務を担われています。そのような中でも、患者さんが「安心して医療を受けていただける病院」であり続けていただきたいと願っています。

成人病センターでの『縁』

元救急部 部長　許 永勝

滋賀県立総合病院（旧滋賀県立成人病センター）に私が赴任したのは、昭和60年（1985年）6月のことでした。当時、経皮的冠動脈形成術（PCI）を行っている施設は日本でも数施設しか無く、滋賀県立総合病院では玉井秀男先生がPCIを開始して半年ほど経過しておりました。研修医であった私は玉井秀男先生と初めて出会い、彼が米国のHatzler先生の元で学んで持って帰ってきたスライドを医局のカンファレンスでみて、全く新しい治療方法に驚愕し、感想を聞かれても反応すらできなかったことを今でも昨日の事のように覚えています。

やがて、私はPCIの黎明期を滋賀県立総合病院で目の当たりにすることになります。急性心筋梗塞に対するdirect PCI、左主幹部病変や慢性完全閉塞病変に対するPCI、そして生体吸収性ステントの開発など、当時の業績を挙げれば枚挙に暇がありません。玉井秀男先生の存在は、またたく間に世界中に知れ渡るようになり、米国や欧州の医師が病院のカテーテル室に見学に訪れるようになり、世界に向けたライブデモンストレーションの発信もしていました。ガイドラインが自分たちの仕事によって変わっていくことを経験し、PCIの最先端を見続けることができたのは私の喜びであり誇りでもあります。

現在PCIは成熟期にあり、どこの病院でも行われる当たり前の手技となり、隔世の感を禁じ得ません。しかし今でも旧西館・東館・カテーテル室の建物の横を通るとき、あの当時のことを思い出します。朝から夜まで過ごしたカテーテル室での仕事、玉井秀男先生や先輩、同僚、後輩の先生方と共に苦労した思い出、一緒に働いてくれたスタッフ達、そして様々なことを教えてくれた患者さん達。様々な顔が思い浮かびます。

様々な人やものと私をつなげ、縁を作ってくれた思い出あふれる滋賀県立総合病院。この度は設立50周年おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

全ては滋賀県民のために

元副院長　鈴木 孝世

成人病センター開設から数えて50年、それは私にとって長いようであっという間の半世紀でした。職員の皆様方に叱咤激励されつつ、常に県民の福祉向上を希求し続けてきた日々を思い浮かべますと、思わず目頭が熱くなってまいります。

センターとの初めての出会いは、医学部専門過程1年目の夏季休暇を活用した自主学習の折でした。当時産婦人科の非常勤講師を勤められていたT先生の「鈴木君、この美しいPapanicolaou染色を守山で勉強しないか」のお声は今でも覚えています。守山が何処にあるかも知らず、導かれるままに府県境を超えた時の物寂しさは何だったのでしょうか。

駅に降り立つと、ほぼ真西に、弱々しくも感じるくすんだ2階建ての建屋が目に入りました。これまた然るべき理由により前日降り立った笠山バス停では滋賀医科大学建設の土埃に見舞われており、奇しくも私の人生を彩る2医療施設の黎明に時を移さず接した運命の瞬間を、今でも恐ろしいことのように思い起こします。

で、歩を進めること23分、頼りなさげにポツンと居座する建物に到着し、約1週間にわたる課外実習、元い、私にとっての50年が始まったのです。

手元に沿革年譜がございます。一県民として改めて年を追って行きますと、滋賀県における成人病センターの立ち働き、その重みが再確認できました。検診業務に始まり、今言うところの生活習慣病の積極予防とその早期発見・早期治療への取り組みへの展開はごくごく自然な道程であったかと思います。高度成長期という波に乗ったとはいえ、その建築・人員配置の妙は県庁はじめ関連諸賢の尋常ならぬご尽力に支えられての賜物でしょう。

生身の体を扱う「高度先進医療」、求め叫ぶ心に寄り添う「相談支援」。「こころ」と「からだ」、この両立を到達目標として連綿と日々健闘されている姿は、誠に雄々しいものであります。皆様方の益々のご活躍を祈念すると共に、これまで成就された数ある施策のうち特筆すべき2,3を載げまして筆をおくことといたします。

1）老年神経内科（物忘れ外来）/緩和ケア科開設
平成5/15年（1993/2003年）
2）都道府県がん診療連携拠点病院指定
平成21年（2009年）
3）医療情報NW「びわ湖メディカルネット」運用開始
平成26年（2014年）

開設50周年に寄せて

元疾病・介護予防推進室 参事　田中 一史

2000年以降、医療機関では、診療記録の開示、個人情報保護法の制定、医療費包括支払制度（DPC）の導入などにより、診療情報の管理が重要視されるようになりました。また、チーム医療の推進と、そのための迅速かつ効率的な情報共有を目的とした電子カルテシステム導入が必然となりました。このような状況の中、2007年から約11年にわたり、成人病センターで情報管理に関連する業務を担当しました。

今も強く記憶に残っているのは、2010年から2011年にかけての電子カルテシステム導入です。予算確保、仕様書作成、入札、システム導入作業から本稼働まで、患者サービス向上や医療安全、利用者の利便性などを念頭に、各部門の要求を聴いたり断ったりしながら限られた予算内でのシステム構築でしたが、川上副院長の指揮のもと、院内各部門の皆様やベンダーの技術者のご協力を得て取り組んだ日々は、とても充実していたように思います。2017年のシステム更新では、2011年に実現し得なかったことや、検温等のデータをスマートフォン経由で電子カルテに取り込むIoT機能の導入にも取り組みました。現場の皆様にはまだまだご不満があると思いますが、それらはまた次のシステム更新の際に要求・改善して、より良い高度なシステムに発展させてくださることを願います。

もうひとつ印象深いのは「がん登録」業務です。成人病センターの医療の軸である「がん診療」の情報を収集して管理・活用することは、治療実績評価や生存率算定などのためだけではなく、県や国のがん対策にもつながることを思い、地味ながら遣り甲斐を感じていました。

現在は、患者として年に数回通院し、行き帰りや待ち時間に、いろいろ懐かしく思い出しています。旧知の職員さんに声をかけていただくのも嬉しいことです。

コロナ禍の影響で医療を取り巻く環境はたいへん厳しい状況であると思いますが、開設50周年を迎えた県立総合病院が今後益々発展していくことを祈念しています。

ボランティア活動をして

ボランティア（園芸グループ）　田中 正樹

当病院のボランティアは18年前（平成15年）病院の新館が建設されるに際して募集された。

また病院がその時取得しようとしていたISO14001評価基準の一つに「ボランティア活動の実施」があった。当初募集されたボランティアは外来の案内と、緩和ケア病棟での対応だったが10人程の応募だった。応募に際して、応募者は健康であることを証明する為に、各自健康診断書を提出した。ボランティア活動するに当たり最初にボランティアとしての心構えの話があった。

中でも特に守秘義務を守るように厳しく注意された。

その後、中庭の日本庭園の手入れをする園芸ボランティア、衣料関係を作る裁縫ボランティアも新たに活動を開始した。他にも病院内通路に自作の絵画等を飾るグループもできた。現在ボランティア全体の人員は80余名が在籍している。我々が活動していて励みとなるのは患者さん、その家族、看護師さん等から掛けられる感謝の言葉である。また「そよかぜ」に寄せられた「親切で心強かった」「気持ちが落着いて癒された」という言葉、或いは「暑い中ご苦労さま」という労いの言葉を聞くのはボランティア冥利につきるものである。

高齢になり、世間一般の会社の職を離れた者がボランティア活動を行うのは、一つには、まだ社会の一員として健康で社会に貢献出来ているという気概を持てることにある。そしてまた同じ気持ちを持ったメンバー同志が交流できるのも魅力の一つである。

私達一同、日々、これらの場が与えられた事を感謝して活動している。

ところで、活動を始めて18年を経た今問題も生じている。各グループ共メンバーが固定化し、高齢化している事である。因みに園芸グループでは平均活動年数14、5年、平均年齢74.5歳になっている。他のグループも同じ傾向にある。ボランティアの必要性、魅力を広く世間に発信し、新しく活動してくれる人達を募集する必要がある。この事を是非病院事務局にお願いしたい。コロナ禍で3月以降、総てのボランティア活動は停止されているが、一日も早く病院の活動に元通り役立てるように、ボランティア全員が願っている。

開設50周年記念誌発刊に寄せて

元臨床検査部 部長　多林 久治

開設50周年をお迎えになられましたこと、心よりお祝い申し上げます。

生活習慣病から県民を守る医療機関として滋賀県立成人病センターが開設され、私は、昭和54年2月に臨床検査部の一員として、成人病センター付属病院にお世話になりました。この年は、第3病棟が開設され、ベッド数が103床から154床に増床された時期でもありました。以来、病棟の増改築・新築に伴い、オーダリングシステムの導入、新しい検査機器の導入と検査の迅速性に基づく検査システムの構築、緊急検査体制や輸血部門の充実、当直体制の確立、病院機能評価受審、そして、チーム医療の一環として「栄養サポートチーム」や「感染制御チーム」への参画など、臨床からの要望に応えるべく、検査部員が一丸となって取り組んだことが懐かしく思い出されます。

また、海外研修生として、平成2年には南米・ボリビアから女性技師を、また平成9年にはアフリカ・マラウィから男性技師を10か月間受け入れ、研修生の母国語での検査技術の指導に取り組むなど、貴重な体験をさせて頂きました。このような環境の中で、臨床検査業務に携わることができましたことを感謝致しております。

近年、日進月歩ならぬ秒進分歩とも言われる速さで医療の高度化が進み、情報通信技術やAI等の最新テクノロジーが医療で活用される時代となりました。これからの臨床検査には、これらの最新の技術を応用し、臨床医学の領域に限らず、生活指導、予防医学、新興・再興感染症関連検査などあらゆる領域での活躍が期待されております。

「ふれあう心で確かな医療」をモットーとして、滋賀県立総合病院が、県民の健康を守り、高度先進医療を県民に提供して頂く基幹病院として、益々ご発展されますようお祈り致しております。

患者さんに寄りそう医療を目指して

元院長補佐　堀 泰祐

開設50周年おめでとうございます。

2003年10月、私は新たに立ち上げられた緩和ケア病棟立ち上げの責任者として、赴任してまいりました。それまでは、一般病院で外科医として働いておりましたので、緩和ケア病棟についてはほとんど素人のような状況でした。前病院でも緩和ケア責任者としてがんの苦痛症状の緩和を担当しておりましたが、緩和ケア専門病棟の運営は初めてでした。

始めの1年間ほどは、外科医気質の抜けない私とスタッフとの意見が分かれ、カンファレンスでしばしばぶつかり合ったのも、今となっては懐かしい思い出です。チーム医療の基本である良いコミュニケーションが取れるようになり、緩和ケア病棟は順調に運営されるようになりました。「患者さんとご家族に寄り添う医療」を実践する緩和医療を目指し、スタッフ一丸となって励んで参りました。

また、滋賀県のがん緩和ケア推進委員会の担当病院として、県全体の緩和ケアの普及に中心的に取り組む役割を担うことになりました。厚労省の定めた緩和ケア研修の実施に関しては、各医療圏域のがん診療連携拠点病院における研修の実施を支援しました。

2015年には院内外の緩和ケア推進のため緩和ケアセンターが設置され、病院内の緩和ケアを進めるほか、地域との緩和ケア連携を進めることとなりました。

個人的な話となりますが、2008年に胃がん、2016年には心臓弁膜症で手術を受けました。健康面で様々な問題がある中、定年まで職を全うすることができたのは、多くのスタッフの支えによるものと感謝しています。特に病棟師長として頑張っていただいた藤原清美さん、音瀬真理子さんには大変お世話になりました。私の退職後、後任の花木宏治先生、川嶋信吾先生、伴敏信先生も加わり心強く感じています。

今後も滋賀県の中心的存在として緩和医療を推進してゆかれると確信しています。最後になりましたが、滋賀県立総合病院の一層の発展をお祈りしております。

滋賀県立総合病院開設50周年によせて

元総長　宮地 良樹

滋賀県立総合病院開設50周年まことにおめでとうございます。院長・総長として在籍したものとして心からお祝い申し上げるとともに、あの時代を追憶するとまさに感無量です。

私は2014年秋に京大教授を二年半ほど早く勇退して、当時の滋賀県立成人病センターに着任しました。着任してまず驚いたのは、医療の質は高く、職員も診療にとても熱心でしたが、経営や地域医療への関心が希薄だったことです。まだ地域医療支援病院にもなっておらず、DPCの観点からの経営感覚が構築されていませんでした。ちょうど新病棟の建築中であったこともあり、このままでは赤字が膨れ上がることが自明でした。2017年に京大病院が法人化したとき、私は経営担当の副院長でしたが、まさに経営や医療安全、地域医療という意識改革を迫られたあの歴史を彷彿とさせるものがありました。着任後直ちに、地域の医療機関を回って紹介率の向上を図るとともに、公立病院という立場に安住しない経営理念の啓発に躍起となりました。私の在任中に赤字を解消することはできませんでしたが、私の蒔いた種が、少しずつ滋賀県立総合病院の土壌に芽吹きつつあるのではないかと自負しています。どうか、医療収支に翻弄されるのではなく、医療人としての夢を忘れずに県民のための医療に邁進していただきたいと祈念しています。

退職後、私は、NPO理事長として皮膚の健康研究に関わるとともに、2021年開学予定の静岡社会健康医学大学院大学理事長・学長予定者として、従来の公衆衛生学をさらに発展させ、ビッグデータ解析など医療現場をもフィールドとした新しい社会健康医学の発展に寄与すべく日々奮闘しています。昨今のコロナ禍でもっとも求められたのは疫学・医療統計・公衆衛生学の知識でしたが、この新しい研究分野にいま心を躍らせ、公衆衛生領域の論文も投稿中です。こうして私のふるさとでもある静岡にいささかでも恩返しができることが目下の私の夢です。

50周年への想い

元院長補佐（兼）看護部長　宮下 孝子

滋賀県立総合病院開設50周年おめでとうございます。昭和53年の春、21歳の私は国家試験の合否に不安を抱きながら、旧成人病センター（現総合病院）に就職いたしました。その年は成人病センターに三つ目の病棟が開設される年でした。それから39年、雨にも負けず風（風邪）にも負けず、ただひたすら成人病センターで看護というものを勉強させていただきました。気が付けば39年、成人病センターから1歩も外の景色を見ることなく（人はこれを井の中の蛙と呼びます）平成29年春、看護職を卒業させていただきました。この39年を振り返るには一つ一つの思い出があまりにも大きすぎて…。医療の進歩に伴う診療科の新設や、昭和1回・平成2回の新棟への引っ越し、医療の質向上のための病院機能評価認定への受審や医療安全対策、またそれらに伴う看護体制の編成等々、幾多の出来事に関わらせていただきました。こうした中「患者さんにとって何が最良か?」という一つの大きな問いをいつも頭において仕事をしていました。そしてもう一つ「看護師にとって働きやすい職場とは?」という問いが加わったのは、看護職晩年の管理職となった時からでした。このような思いを胸に、様々な場面で発言をして参りました。また、病院という組織はとても多くの職種で成り立っています。その多くの職種の方々から受ける、プロとしてのほこりや使命感などの熱い志が、看護師としての私を成長させてくださったのは間違いありません。このような方々と一緒に仕事ができたのはとても幸せなことでした。社会人になり、還暦までをどっぷり成人病センターに浸かった私が今思うことは、「看護師として成人病センターを選んでよかった」この一言です。

退職した翌年、成人病センターは一つの役目を終え、総合病院として新たにスタートされました。今後のますますのご発展を心よりお祈りいたします。

振り返って

元リハビリテーション科 専門員　矢木 清美

私が、理学療法士として赴任したのは平成元年の34歳の時でした。

成人病センターのリハビリテーションが開設したのは理学療法士2人体制で、昭和58年西館3階整形外科病棟開設が始まりと聞いています。その頃はまだ、理学療法士や作業療法士は人材確保が難しい状況であったと思います。

私が赴任した当時はスタッフ5人体制（理学療法士3人・作業療法士1人・助手1人）だったと思います。対応すべき患者数に変動あるなか、リハビリへの要望も増え、安定して十分な仕事が出来るよう努力していました。

その後、リハビリテーションセンター構想が持ち上がり、開設に向けスタッフ増員され、リハビリ業務も徐々に拡大し、院内の要望にも対応できるようになってきました。平成18年にリハビリテーションセンターが開設され、院内のリハビリテーション医療部と県のリハビリテーションを推進する支援部が立ちあげられました。私が、定年退職する頃には、県内のリハビリテーションを推進して行く役割を担うようになってきました。私も僅かながらその一翼を担えたことを、今では誇りに思っています。

長い間この仕事を続けて想うことは、困難な状況に立たされた中でも、少しでも良くなりたいという患者さんの想いに、私自身が励まされ勇気や元気を頂けた事への感謝です。

今日の病院やリハビリテーション部門の発展は、これまでの沢山の方の協力や関わりを得ながら、成し遂げられてきたものと思います。これからもその想いを忘れず、自信と誇りと情熱を持って前に進んで下さい。陰ながら皆様のご活躍とご健康を祈っています。

50周年おめでとうございます。

資料編

滋賀県立総合病院

50年のあゆみ

許可病床数 検診ベッド 30

・成人病センター開設
・胃集団検診開始
・子宮頸がん検診開始

・保健医療機関指定

・がん登録集計作業開始

	昭和45年（1970年）	昭和46年（1971年）	昭和47年（1972年）	昭和48年（1973年）
所長・総長	福田　正	福田　正	福田　正	福田　正
病院長	―	―	―	―
研究所長	―	―	―	―

国内・滋賀県の出来事

昭和45年（1970年）

・県下7番目の市として守山市誕生
・日本万国博覧会開催

・全国の高齢化率4.9%
・平均寿命
男性69歳、女性74歳

昭和46年（1971年）

・奥琵琶湖パークウェイ開通
・県内総人口90万人突破
・第二次ベビーブーム始まる

昭和47年（1972年）

・鈴鹿スカイライン開通
・琵琶湖総合開発特別法成立
・びわ湖放送開設
・日中国交正常化共同声明
・沖縄施政権返還
・札幌冬季オリンピック

昭和48年（1973年）

・守山駅新駅完成
・老人医療費無料化

海外の出来事

1971年
・ドルショック

1973年
・オイルショック
・第四次中東戦争